

稲・麦・大豆かわら版

～大豆編(適期収穫)～

2026.10.21 発行
栃木県塩谷南那須農業振興事務所
経営普及部 0287-43-2318
<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g55/>

収穫のポイント

○適期収穫を行い、しわ粒や腐敗粒の発生を防止しましょう！

1 適期収穫の目安

落葉期		○葉や葉柄が黄化して落ちる、または手で触って簡単に落葉する頃 ○茎水分70%程度 →茎に緑色が残っている ※成熟期までの日数 ・落葉5割：成熟期まで約10日程度 ・落葉8割：成熟期まで約5日程度
成熟期	完全落葉後15～25日 	○葉や莢が品種特有の色に変化し、莢を振るとカラカウと音がする頃 ○茎水分60%程度 →莢と同等の褐色
収穫適期	成熟期後10日～ 	○穀粒水分18%以下 →爪を立てると少し跡が残り、歯で噛むと割れる程度 ○前日・当日の降雨なし →収穫可能時刻は10～17時頃 ○茎水分40%以下 →ほとんどの茎が黒変を始め、手で折ると軽くポキッと2つに折れる ※しわ粒や腐敗粒の発生防止のため、適期を逃さずに収穫を行う

※写真提供：那須農業振興事務所

茎水分の目安

70%: 緑色が残る
60%: 莢と同じ褐色
40%: ほとんどの茎が黒変開始し、 剥皮率が30%程度 手で折ると軽くポキと折れる

子実水分の目安

20%: 噛むと音がせずに割れる
18%: 爪を立てると少し跡が残る
15%: 噛むとパリッと割れる。



主茎長

剥皮率＝
剥皮長／主茎長×100

剥皮長
(皮の剥げる長さ)

剥皮率の求め方

2 しわ粒＜適期を逃すと「亀甲じわ」、生育後半の栄養不足で「ちりめんじわ」＞

	亀甲じわ	ちりめんじわ
写真	 出典：令和5年産大豆の栽培技術指針	 出典：令和5年産大豆の栽培技術指針
発生原因	・子実形成から収穫期前後までの乾燥・吸湿の過程で、皮と子実の膨大・縮小の繰り返し	・生育後半の栄養不足
対策	・収穫適期を逃さない（刈遅れNG!） ・収穫時に青立ち株や残草がある場合は予め抜き取っておく ・収穫後一時貯留する場合は、湿度の高い場所に置くと水分が戻り、亀甲じわ粒の発生が多くなるため注意する	・子実肥大盛期頃の栄養状態の改善 →土壌診断に基づき土づくり肥料の施肥を行う 肥効調節型肥料や微量元素（堆肥等）の施用 ・牛ふん堆肥1～2t/10a ・発酵鶏ふん250kg/10a

3 次年産へ向けて

- 水田輪作により連作を回避しましょう。
- 排水対策を徹底しましょう。
- 積極的な土づくり（しわ粒の発生防止・粒の充実向上）を行いましょう。

(1) 連作の回避

- ・連作を行うと、茎疫病等の土壌伝染性病害、ダイズシストセンチュウ等の虫害、畑雑草の発生量が増加する。大豆の生育量が抑制され、小粒化しやすくなる。
- ・田畑輪換を基本とした作付けを行う。

【栽培スケジュール（2年3作）の例】※麦・大豆作付けほ場

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1年目		(ほ場準備)				水稻(主食用米)				(ほ場準備)		麦
2年目			麦		(ほ場準備)			大豆				(ほ場準備)

(2) 排水対策の徹底

- ・大豆は湿害を受けやすい。プラソイラ等による心土破碎を行い、浸透排水性を良くする。
- ・ほ場周囲に排水溝（額縁明きょ）を設置する。

(3) 土づくり

- ・小粒化やしわ粒発生（ちりめんじわ）、収量低下の大きな要因は土壌有機物の消耗と地力窒素の低下である。
- ・土壌診断を行い、pH6.0～6.5を目標に、苦土炭カルや苦土消石灰を施用して矯正する。
- ・稲わらや麦稈を全量鍬込み、地力窒素の低下を防ぐ。
- ・堆肥の施用や緑肥作物のすき込み等により地力を維持する。
- ・作土深は20cmを確保する。